

【横浜ダンスコレクション EX2013 Competition I 総評】

コンペティション I の作品部門に、エントリーした 5 カ国 124 組の作品からコンテンポラリーダンスの裾野の広がりをみた。コンテンポラリーダンスは、誕生から 30 年程と言われる若いアートだが、今や、ヨーロッパや北米だけでなく、南米、アジア、アフリカなど全地球規模で広がっている。開始から 18 回を迎えた横浜ダンスコレクションは、海外からも注目され、毎回、ダンスフェスティバルや劇場のディレクターやプロデューサーが多数来訪する。そして、受賞者だけではなく、オリジナリティを携えた才能溢れる若い振付家を招待し作品上演の機会を増やしている。つまり横浜ダンスコレクションは、18年間も世界に開かれたダンスプラットフォームで在り続けている。

この横浜ダンスコレクションで次代を担うアーティスト達の成長を実感できるのは殊のほか楽しい。中村蓉の振付作品を観るのは 3 作目。演出や表現法の引き出しの多さとセンスの良さが印象的で、本作では映画の中のドラマを軸に、テキストやユーモア、小道具のセンスを効かせて、社会の中での家族や女性の問題を提示しつつ、ささやかな悦楽を表出させる構成力を持っている。入手杏奈の作品(2012 年 3 月初演)は、演出、照明、音響を含めて総合的に完成度が高く、振付家の成長と共に作品自体の進化を見せた。夥しい数の飴は彼女自身の社会への疑問、不満、不安ということだろうか。音、映像、身体による強度のある奥野美和作品をはじめ、本選に臨んだ 12 組の作品はいずれもユニークな視点で世界観を描き出していた。また、独自のキャリアから個性を際立たせる作品を上演した、韓国の実力派、キム・ボラム、シマダタダシ、荒悠平の次回作にも注目している。

どれだけ真摯に身体と向き合うのか—今までに無いような、世界中で同時に起こる様々な問題に対峙して、まだ言葉にすらできない感覚を身体のみで描き出すアーティストたちこそが、今の世界が生き抜いて行ける新たな叡智を生み出す可能性を持っていることを思う。

小野 晋司 (青山劇場・青山円形劇場 プロデューサー)

今回も映像、本選と、作り手と審査する人それぞれの価値観が刺激的に交錯した。

残った 12 作品はいずれもはっきりした個性を持ち、ずば抜けたインパクトを持つ作品はないかわりに、自分にしかできない表現を高純度であぶり出そうとする切実さは審査にかかわった 4 回のなかで最も強く感じた。

本選までの期間に推敲を重ねるのは振付家の気概と思う一方、それが出発点の勢いを弱めているように思えるところもあって、やや複雑。受賞した中村蓉、奥野美和らはすでに独自のスタイルを獲得しつつあるように見える。

入手杏奈のふてぶてしいほどの踊りの強度、キム・ボラムの明るく楽しい身体、木原浩太や秋津さやかの着想の面白さなども心に残った。

新藤 弘子 (舞踊評論家)

誰でも応募のできるコンテンポラリー・ダンス作品の登竜門として、歴史を積み上げてきた横浜ダンスコレクション。この事業の特徴は、もちろんコンペティションなので、様々な賞の獲得を目指した“競争”であるのだが、同時に、見る人たちにとっては、「誰が受賞するのか?」という興味とは関係なく、いまだ知らないダンス作品に出合うための、いわばショーケースとしても機能している点だ。

コンペティション I 部門では、今年も、200 あまたの映像による一次審査を経て選ばれた 12 作品が、3 日間に渡り、会場である横浜赤レンガ倉庫 1 号館で、世界各国から集ったダンス・プロフェッショナルや観客の前で上演された。

台湾のリン・ヨウルー、そして韓国からはキム・ジュンヨンとキム・ボラムが最終選考に選ばれた。なかでも、3 日目の最後に登場したキム・ボラムの作品「Coexistence」は、受賞こそ逃したが、なかなかの意欲作だったと思う。また、受賞こそ逃したが、雨音と飴が印象的な入手杏奈の「15 月」や、木原浩太「足と足音のステップ」は、受賞してもおかしくない力作だった。さらに、多くの人がある存在を知らなかったであろうシマダタダシ“twilight”も、「踊る」というよりは「動く」もしくは「とどまる」身体への関心を露わにしている、目を奪われた。特に、木原の作品は、終演後、何人かの海外プロデューサーに「なぜ、グランプリが KIHARA じゃないんだ!おかしくないか?」と抗議されたほど、専門家の評価も高かったことを記しておきたい。

審査員賞とシビウ国際演劇祭の賞を受賞した中村蓉の作品は、「作品内容が凡庸で新鮮味に欠ける。」との声も聞かれたが、その構成力と、作品の持つ嫌みのない空気感が支持を得たのだと思う。また、今年からグレードアップした感のあるフランス大使館賞と MASDANZA 賞を受賞した奥野美和は、高い身体能力を活かしての一層の伸びしろを期待される。

今年の『ダンコレ』は、全体的に収穫の多い内容だった。が、一方、一昨年の川村美紀子のような、飛びぬけて関心を引くような才能には出会えなかった。それが「ダンス」と呼ばれようが、呼ばれまいが、いまだみたことのないものが見たい。たとえそれが無いものねだりの欲張りな気持ちだとしても……。

前田 圭蔵 (NPO 法人 リアルシティーズ 理事)

中村蓉のソロ“別れの詩”は、小津安二郎の映画の台詞を素材に、言葉と心のズレをユーモラスに追求して出色の出来。今後の展開が楽しみ。

奥野美和 “ハイライト オブ ディクライン”は、映像を背景に彼女の身体が崩れ落ちていくさまが異様な力で見守る者に迫る。

オリジナリティのある動きで不思議な空間を生んだシマダタダシ“twilight”は意想外の収穫。

入手杏奈のソロ“15 月”は、狂気を帯びた動きとそれを見つめる彼女自身の醒めた視線のせめぎあいがある奇妙な居心地の悪さを生んで面白かった。

そのほか独自の肌触りの荒悠平、ダンサーとしての魅力が光る木原浩太、木村愛子、韓国の新しい潮流を感じさせるキム・ボラムなど、心に残る作品は多い。

これからも既存のコンテンポラリーダンスから積極的に逸脱しようとする新しい表現の出現に期待したい。

浜野 文雄 (新書館「ダンスマガジン」編集委員)

授賞式で私が言ったのは「もっとワイルドで繊細に」であった。しかし人の道を踏み外すほどの素敵で野蛮なダンスは、ダンコレに応募などして来ない…。いや、どこか余所で勝手に火花を散らしているのかも。その「余所」とは何処かといえば、今回の応募者全員の「未来の身体」であるだろう。

3年間同じメンバーでの審査であったが、応募作の水準が高くなっているという意見で一致、じっさい激戦であった。それに海外のキュレーターの客人たちの顔ぶれも継続して来浜し、さらに拡大しているように思われた。

新たに船出をした新人たちが受賞を機にさらに国内・外の荒波にもまれ、新しい時代の要になってゆくことが希望であろう。

室伏 鴻（舞踏家・振付家）

今年の横浜ダンスコレクション EX コンペティション I も、驚きと発見の多い年でした。

本コンペティションには、アジアの国々の若き振付家 124 人から、ビデオによる作品応募があり、その中から最も個性のある 12 作品が満員の舞台で発表されました。

審査員賞は、小津安二郎の映画にインスピレーションを受けた、ノスタルジックな色合いの作品を発表した中村蓉さんが受賞しました。演劇的な形式と、振付作品としての見せ所が巧みに一体化した作品でした。

また、その圧倒的な存在感と、広がりのある独創的な身体の動きによって審査員に感銘を与えた、横浜出身のダンサーであるシマダタダシさんは奨励賞を受賞しました。

最後に、ビデオ映像とダンスと音響を知的に組み合わせ、美しく成熟した作品を発表した奥野美和さんには、若手振付家のための在日フランス大使館賞が授与されました。

この受賞により奥野さんは、7 月よりフランスに 6 ヶ月間滞在し、パリ、モンペリエ、リヨン都市圏にある国立舞踊センターや劇場、フェスティバルといった、フランスを代表するダンスシーンを経験することになります。

彼女の芸術的アプローチがさらに確たるものとなり、滞在中での豊かな出会いや交流を経て日本に戻ってくることを確信しています。2014 年の公演ダンスクロスでの新作発表を、今から楽しみにしています！

レベッカ・リー（アンスティチュ・フランセ横浜 館長）